

C. Jouco Bleeker

— 日和見主義者か，フィクサーか，善意の宗教現象学者か？ —

藤原 聖子*

はじめに

C. J. Bleeker(1898–1983)は G. van der Leeuw に続くオランダの宗教現象学者として、また IAHR (International Association for the History of Religions 国際宗教学宗教史学会) の初代事務局長として知られる。このポジションからすれば、1950～70 年代の宗教学界の中心的人物なのだが、それでいて謎めいたところがある。「本質直観」「テオリア」「ロゴス」などの哲学的な術語を使った理論を展開する一方で、「宗教哲学を IAHR に含んではない」と公言する。あるいは、「アジアの宗教学者は実践的であり純学問（科学）的ではない」と言ったかと思うと、数年後には同じ批判を自らが受けている。この矛盾をどうとらえたらよいのだろうか。Bleeker は相手が変わると言うことが変わる、ご機嫌取りの日和見主義者だったのか。あるいは意図を隠して立ち回るフィクサーだったのか。それとも、私的・政治的利害関心はなく、善意から国際学会に尽くしたのみであり、むしろ不器用だったのか。本稿は、現在から見ると不可思議な Bleeker の発言・態度を、IAHR という場に現れる彼の学問観と宗教現象学観の関係をたどることで読み解いていく。

1. Bleeker の二面性

1.1 代表的宗教現象学者

宗教学の学説史上は Bleeker は代表的な宗教現象学者の一人として位置づけられてきた。そのような評価が意味するところは、宗教と宗教学の固有性を強調し、疑似神学的であり、宗教間対話のような実践的目的を宗教学に与えたというもので、これらは現在もつばら批判的にとらえられている特徴である。もっとも、21 世紀に Bleeker をことさらに批判する宗教学者はそうおらず、宗教学の規範性に対して自己反省が向けられる前の時代の、善意だが素朴だった宗教学者として思い出されることが一般的であろう。

M. Eliade 編『宗教エンサイクロペディア Encyclopedia of Religion』の「BLEEKER, C. JOUCO」という伝記的項目は、Bleeker を継ぎエジプト宗教史を専門とするオランダの宗教学者によって書かれている。宗教現象学発祥の国であるオランダでは、Leeuw, Bleeker の後続世代の Th. P. van Baaren が 1970 年代初頭に宗教現象学を批判し、世代間に断絶が生まれたが、その後続世代に属する M. Heerma van Voss(1987)によるものである (van Voss 1987)。

この項目では、Bleeker はまず「オランダのエジプト宗教史家」であり「宗教現象学分野の中心人物」とであると紹介され、以下の略歴が続く。

* 東京大学大学院・教授

オランダ北部 Beneden Knijpe 生まれ。

神学を学ぶためにライデン大学に進学し、エジプト学と宗教史学を専攻。

W. Brede Kristensen に師事。ベルリン大学でも研究。

1929 年にライデン大から Th.D. を取得。

博士論文は “De beteekenis van de Egyptische godin Ma-a-t (エジプトの女神マアトの意義)”。

1925～1946 年 オランダ改革派教会の牧師。

1946～1969 年 アムステルダム大学の宗教史・宗教現象学の教授。

1950～1970 年 IAHR の事務局長

1960～1977 年 *Numen* 編集長

Numen Book Series の「Studies in the History of Religions」叢書を監修

Geo Widengren と二巻本 *Historia Religionum* (1969–1971) を共編

研究については、エジプト宗教研究の方は、特定の神またはエジプトの祭儀などエジプト宗教の特定の側面にフォーカスしたものであること。宗教現象学の研究の方は、Kristensen と van der Leeuw に強く影響を受けており、宗教現象学を固有のディシプリンとして確立することに関心があったことが述べられている。Bleeker にとっての宗教現象学とは、宗教現象の意味を、その本質に照らして探求することであったとされ、さらにその目的は、テオーリア、ロゴス、エンテレケイアの 3 つであったと紹介されている。テオーリアとは、全ての、または多くの宗教体系に現れる個別の現象（例：「祈り」）を理解すること。ロゴスとは、特定の宗教の構造を決定している内的法則を発見すること。エンテレケイアとは、諸宗教が発達し進化する過程を説明することである。さらに、Bleeker は宗教学を、人間と神の様々な関係の探究としてとらえ、人間の神に対する多様な態度から、人間というものを理解しようとしたとまとめられている。また、宗教学は異なる宗教集団間の相互理解と尊重を促進することができるという説いたとある。

久保田によれば、宗教集団間の相互理解を促進しようとするそのような実践性・規範性は、Bleeker が 20～30 歳代に、自由キリスト教学生同盟 (Vrijzinnig Christelijke Studenten Bond)、さらに自由キリスト教的宗教間対話運動に積極的に関わったことに由来する（久保田 2021）。この面では Bleeker は、現在の宗教学で言うところの「レリジョニスト religionist」（宗教家のような宗教学者）の特徴を顕著に示している。

1.2 科学派の先駆

その一方で、Bleeker の発言はまた、IAHR において許される宗教学は神学性・護教性のない「科学的」なもののみと主張する現在の宗教学者 (Wiebe 2021, Ambasciano 2019) の言うことに重なることもある。たとえば、1958 年の IAHR 東京・京都大会に参加した Bleeker は、いささか単純化ではあるが、と断りつつも、西洋の宗教学者に比べてアジアの宗教学者は経験科学的ではないという評を残している。

東洋の学者には、宗教の核心に達しうる最善の方法は直観であり、宗教現象研究の究極

的成果は宗教の実際の価値のより深い洞察にあるはずだとする傾向がある。他方西洋の宗教学者（宗教史家 *historian of religions*）には、なすべきことはある宗教の大なり小なり一部を切りとりそれを丹念に研究し、その宗教的意味を仮説として理解することのみであり、いかなる価値判断も控えなければならない、という確信がある。（Bleeker 2015[1960]: 72）

西洋の宗教学者は実証を重んじる科学者だが、東洋の宗教学者は神秘家だというのである。これは当時、日本の宗教学者にはアジアに対する偏見として受け止められた（後藤・田丸 1980: 24-25）。

これに先立つ 1954 年には、IAHR 世界大会を日本で開催することについて、自分には懸念する点があると当時の会長 R. Pettazzoni への私信で述べている。

日本の宗教学（*la science de la religion*）は、一部、実践的目的を持っている。だから、IAHR に加わりたいという申請の目的もそうだ。私はリベラルなクリスチャンであり、IAHR の副会長¹だが、日本宗教学会と協力できるかどうか疑問だ。これは理論的観点からはとても興味深い問題ではある。我々の純・科学的方法是はすばらしいが、今日の人類の役に立つだろうか。東洋では、宗教学を含むすべての力が社会の再建に用いられなくてはならず、よって宗教学もその科学性を失う恐れがある。君の考えを聞きたいところだ。（Toti 2013: 84）

日本の宗教学あるいは学術全体は戦後復興のために行われているが、そういった社会的有用性のある応用科学は客観性に欠けるため、日本は IAHR 世界大会を開催する場として適切かどうか迷いがあるというのである。

さらには 1960 年 IAHR Marburg 大会中の役員会²で「IAHR の名称」が議題になったとき、Bleeker が「宗教哲学はお断り」と発言したことが記録に残っている。Wilhelm Koppers（カトリック司祭・宗教民俗）と Wilhelm Keilbach（カトリック司祭・宗教心理学）から、IAHR の名称を “International Association for the *History* of Religion” から “International Association for the *Science* of Religion” に変更することが提案された。これに Bleeker は難色を示したが、理由としては、歴史学・文献学系以外の宗教学、すなわち宗教現象学・社会学・心理学は数としてはまだ少ないこと、さらに、宗教哲学が含まれることを挙げている。名称が *Science of Religion* に変わると宗教哲学にまで範囲が広がるというのは不思議に見えるかもしれないが、この場合の *Science* は *Wissenschaft* の英訳であり、*Science of Religion* は哲学系も社会科学系も包摂する宗教研究の範囲を示していた。Bleeker はそのように変更すると、IAHR の良き伝統が失われると危惧した。「もし宗教哲学が IAHR への参加を許されるなら、哲学の

¹ 正確には事務局長。

² 出席した役員は、Widengren 副会長、Bleeker 事務局長、Swami B. H. Bon Maharaj, A. Brelich (Pettazzoni の代理), Fr. Heiler, 石津照璽, E. O. James, H. Ludin Jansen, 岸本英夫, W. Lameere, Ch. Picard (H.-Ch. Puech の代理), H. W. Schneider, G. Scholem, Sung Bum Yun である。

全領域が入ってくるだろう。これは不可能だ」(Congress Organizing Committee 1961, 22)と述べている。ヨーロッパ、その中でも特にオランダ、北欧、イタリアなどでは、宗教学は歴史学に近く、哲学とはディシプリンを異にするという認識があり、これは現在も続いている。宗教哲学に門戸を開けば、哲学の一大勢力が IAHR を乗っ取ってしまうと Bleeker は警戒したのだろう。現在の science の語の一般的用法に従えば、この時の Bleeker の発言は、むしろ宗教哲学は非科学、宗教史学は科学という対比だった。

2. 二面性をどう理解するか？

2.1 宗教現象学者の顔は仮面だったのか

オランダ宗教学において、van Baaren よりもさらに後の世代に属す J. Platvoet は、Bleeker が宗教現象学に言及したのは「リップサービス」だったと述べている³。Bleeker はもちろん Leeuw の宗教現象学関連の著書を読んだには違いないが、師弟関係にはなく、ほとんど交流はなかったという。宗教現象学に対して好意的に述べたのは Leeuw への配慮か、自分の宗教学は神学ではないと見せるための方便だったということである。現在は宗教現象学＝疑似神学という見方が定着しているので、わかりにくいかもしれないが、オランダの宗教学は 1877 (1876) 年の高等教育改正により、国立大学の神学部を教派の神学から切り離したところを制度的起源とする。20 世紀前半までは、神学部にふさわしい、神学とは異なる科学的な宗教学を意味する言葉として、「宗教現象学」の語に需要があったのである。

2.2 科学派の顔が仮面だったのか

前述の、東西の宗教学者の比較が含まれているのは、Bleeker が 1960 年 IAHR Marburg 大会の総会での議論のたたき台として配布した論文「宗教史学 (history of religions) ⁴の将来の課題」(Bleeker 2015[1960]) である。西洋の宗教学者は経験科学的だとしたこの論文は、しかしながら、ヨーロッパ人の参加者から批判を受けることになった。というのも、論文の後半では、純・科学的な営みを超えて、宗教学の成果を積極的に社会のために役立たせることを提言しているためである。これに危機感を抱いたのが後に IAHR の事務局長に選ばれる Z. Werblowsky である。Werblowsky は、IAHR は純科学的な目的のみを志向すべきだと謳う声明「宗教 (史) 学の最小限の条件」を作成し、17 名の宗教学者から署名を得て、総会にこれを提出した。

Werblowsky はその声明の前置きとして、これは宗教学を余すことなく体系的に定義したものではなく、Bleeker 論文への応答であること、また自分は決して、何らかの学派のマニフェストの類を作ったつもりではなく、単に研究を行う上での基礎的な最小限の前提と思われるものをまとめた断り書きをしている。声明は以下の 5 点からなる (原文のままではなく要約)。

³ 2017 年 8 月に筆者が行ったインタビューによる。

⁴ 現在の宗教史学 (歴史学的方法をとる宗教学) よりも範囲が広く、「宗教学」とも訳し得る。IAHR で行われる宗教研究全体を指している。

1. 東洋の学者は直観派で西洋の学者は分析的だと見るのは極端である。比較宗教学は宗教の本性（本質）と機能について、「科学的に正当な一般化」を行う。
2. 宗教学は人文学の一つであり、宗教体験も文化の一部として経験的事実として扱う。宗教の絶対的価値についての議論は神学や宗教哲学に回す。
3. 「宗教は超越的な真理の現実化であるということを前提にしないと宗教の価値はわからない」という考え方は宗教学の基礎ではない。
4. 宗教学は、学の外側にその正当化の根拠を求める必要はない。個人として宗教学で得たことを用いて社会活動をするのは構わないが、宗教学のエトスは学の中にある。
5. 宗教的理念にせよ世俗的な理念にせよ、推進するのは個々人の信条としては構わないが、それによって IAHR の特徴を規定してはならない。(Schimmel 2015[1960]: 82-83)

3 の「宗教は超越的な真理の現実化であるということを前提にしないと宗教の価値はわからない」という表現は、Bleeker 論文に含まれていたものである。

この読み上げに続く全体での議論の最後に、Bleeker は、これはさらなる議論のほんの出発点に過ぎないとし、また、Werblowsky と自身の違いは、科学は啓示について語ることはできないが、宗教者が超越的存在に関わっていると信じていることを、宗教学者も考慮すべきと見るかどうかだとまとめている。ただし宗教学の会議はエキュメニズムでも宗教者会議でもなく、宗教史の科学的研究のための会議であるということをはっきりさせなくてはならないと結んでいる。

このように Bleeker は事態の収束を図ったのだが、後世の科学派の宗教学者の間では、Bleeker のこの時の態度は彼が疑似神学者だったことの証拠だと見なされていった。たとえば G. Casadio は、Bleeker は IAHR の目的として真理の探究 (quest of truth) を掲げ、Werblowsky 等に問題視されたと論じている (Casadio 2015: 335)。これは、Bleeker がアジアの宗教学者にあてがったイメージを、そのまま Bleeker に振り向けたようなものである。

2.3 もう一つの対立軸

以上のような科学か神学・哲学かという方法論・学問論的問題、それに重ね合わされた西洋 vs. 東洋という対立軸に加えて、もう一つの対立軸が Marburg 大会には存在した。それはヨーロッパ vs. アメリカの政治的対立である。この対立については大会の公式記録には言及がないが、シカゴから J. Kitagawa, M. Eliade とともに参加した C. Long には鮮烈な記憶として残っていた⁵。

Long によれば、Marburg 大会の総会での議論において、Bleeker も Werblowsky も本当に関心があったのは、方法論ではなく、政治だった。第二次大戦後のマーシャル・プランのもと、当時のヨーロッパ人はアメリカの影響力の増大を脅威ととらえていたという社会的文脈のなかにこの大会も位置づけられるというのである。対立が表面化したのは、シカゴ大学の宗教学者が中心になり大学出版から刊行することになった雑誌 *History of Religions* の創刊号（のファクシミリ版）を Long たちが Marburg に持参して Bleeker に見せたときだった。

⁵ 2019 年 9 月に E. Ziolkowski が行った聞き取りによる。

Bleeker や他のヨーロッパ人はこれを歓迎するどころか、「history of religions の雑誌は IAHR の Numen のみであるべきだ」と冷淡な反応を示したという。自分たちの宗教学, history of religions というアイデンティティ, さらには IAHR をアメリカに奪われると警戒したのである。

Long からすればこれは噴飯もので、というのもシカゴ側は Bleeker 等を全くライバル視していなかったからである。シカゴから見ると IAHR は「古くさいヨーロッパっぽいこと old European thing」をやっているという印象しかなかったという。1953 年にシカゴ宗教学の J. Wach がヨーロッパから講師をハスケル講座のために招聘しようとしたとき、当時院生だった Long たちは Eliade の存在は知っていたが、IAHR についてはほとんど知らなかった。ではなぜマールブルク大会に参加したのかといえば、それは 1959 年に American Society for the Study of Religion⁶が発足し、これが IAHR の加盟学会になったため、それを經由して Eliade, Kitagawa に同行することになったのだという。

したがって Long はこの対立を、ヨーロッパの流儀以外を国際学会から排除しようとするヨーロッパ中心主義によるものとして受け止めた。Bleeker の東西比較をアジア人蔑視と見た日本の宗教学者と同様に。それに対して、Bleeker の方は、自分や IAHR 会長 Pettazzoni を含むヨーロッパの宗教学者は、歴史学・文献学的方法に則った経験科学的宗教学を重視するため、文献学的には甘いシカゴ学派が History of Religions を名乗るのは許せないのだと、つまりあくまで方法論・学問観上の違いからくるものだととらえていた。もちろん、本音や潜在意識にはヨーロッパ優越感があったのかもしれないが、それは確認できない。

だが、Bleeker の公的な見解がそのようなものである以上、彼が掲げた宗教現象学は（たとえ仮面だとしても）、厳密な歴史学・文献学に基づいていなくてはならないはずである。彼の宗教現象学も「本質直観」を用いるのであれば、それは日本の宗教哲学者の「直観」とは違う、科学的な方法でなくてはならないはずである。実際にはどうだったのか。これら 2 点に注意しながら、Bleeker の二面性は単なる矛盾なのか、論理的に結びついていたのかを、彼の書いたものから確認していこう。

3. IAHR 諸会議での講演・報告

3.1 「回顧と展望 Looking Backward and Forward」(Bleeker 2015[1951])

Bleeker は IAHR の諸会議・大会の際に度々講演や報告を行っており、その原稿は後に会誌等において出版されている。最初のもは IAHR が発足した 1950 年アムステルダム大会での締めくくりの講演である。

この講演は大会の内容をふり返るところから始まる。まず、この大会は「文明における神話—儀礼の類型」をテーマにしていたが、予想ほどそのテーマに直結する発表が集まらず、最終的に結論に至るということではなかった、と総評を行う。そこで、全てのレジュメに目を

⁶ アメリカ宗教学会 (American Academy of Religion) とは異なる、推薦された会員により構成される小規模の学会。現在も存在する。

<https://www.assr-religion.org/default.html>

通した事務局長として、どの方向に宗教史学 (history of religions) ⁷ が向かおうとしているかをまとめてみたいと述べる。IAHR 創立という点でも、会員が共通のヴィジョンを持つことが必要だからと言う。そして、レジュメをもとに、地域・宗教史ごとの神話—儀礼類型の整理を行ってみせる。

その後、今後の課題として3点を提示している。第一に、上記の整理によって明らかになった研究の空白部分を埋めること。第二に、東洋からの研究者の参加を増やすこと。第三に、大会のテーマについては、時期尚早だったと述べ、研究が十分ではないうちに焦って理論を作るべきではないと述べている。これは当時、神話と儀礼の間には一定の関係性があり、類型化できると主張する派と、それに対して懐疑的な派が存在したが、この論争に決着がつくほど研究は進んでいなかったということを指す。

続いて宗教現象学の可能性について論じている。今後の課題の内、第三のものに取り組む上で、役に立つ方法の一つは「現象学」だと Bleeker は考えていることが述べられる。現象学の方法により類型を判別することができる（「この方法は私たちの目を鋭くしてくれる」）という。現象学が必要なのは、宗教史学だけでは、宗教とは実際のところ何なのか、その本質 essence と現れ manifestation において何なのかに答えは出ず、それでは研究の意味がないからだという。

その宗教現象学の方法を、この講演では4要素から成るとして説明している。すなわち、①各宗教をひとまとまりにとらえ、宗教間の平行現象・類似現象を発見する ②各宗教についてそれ固有の特徴を特定する ③宗教の背後には、聖なるものに対する人間の特別な志向性 orientation がある ④各宗教には固有の本質があり、それは直観 intuition によってとらえられる。直観とは、一気に in one grasp 本質をとらえる、想像力 imaginative faculty である。

個別宗教史のデータを統合し、宗教とは何かをとらえるために、現象学の導入が必要なのは、宗教史研究 history of religions だけでは表面的になり、それ以上のことを言おうとする研究者の空想に過ぎなくなるからだという。宗教史学者は考古学者や文献学者の研究成果に依存しており（考古学や文献学の成果の二次利用）、その成果を自ら変えることはできないため、それを踏まえた上での宗教現象学を行うしかない。宗教現象学は拙速な結論を導かないための安全装置であると述べている。

最後には、世界の全ての文明のパターン（類型）の特徴をとらえることがこれからの課題であること、それが実現すれば、最も困難な課題「真に統合された現代社会のパターンとはどうあるべきか」にも答えが出るだろうと結んでいる。

以上の講演の特徴をまとめるならば（以下、筆者による同様のまとめは太字で示す）、

- ・各宗教史のデータを統合し、分析する上で、**宗教の類型把握、本質把握を可能にする現象学の直観という方法が有効であるとして、宗教現象学に高い可能性を見ている。**
- ・その直観は、単なる空想とは異なる**科学的方法である**と位置づけられているが、なぜ科学的と言えるのかについての説明はない。
- ・なぜ宗教現象学が必要かについては、**歴史学・考古学・文献学的方法だけではデータの羅列であり、意味のあることは導けないことを理由としている。**最終的には、宗教現象

⁷ 注4参照。

学が現代の世界の統合につながると考えていることが最後に窺われるが、それについての詳しい説明はない。

といったところが注目に値する。

IAHR 初代会長は最も代表的な宗教現象学者である Leeuw であり、初代事務局長に就いた Bleeker も最初から宗教現象学を打ち出している。この講演で世界の統合を宗教学の社会的意義と見なしているのは、第二次大戦後の初大会ということも一因であろう。

3.2 「宗教史学と隣接する宗教学，特に神学・宗教社会学・宗教心理学・宗教現象学との関係 The relation of the History of Religions to kindred religious Sciences, particularly Theology, Sociology of Religion, Psychology of Religion and Phenomenology of Religion」(Bleeker 2015[1954])

これは 1953 年の IAHR の会議での報告であり、後に *Numen* に IAHR の会報として掲載された。タイトルにあるように、宗教学の諸分野を比較しているが、宗教史学は宗教学 (Science/s of religion) の下位概念ではなく、同位の別分野として扱われている。

まず神学と宗教史学の関係については、神学者も神学は宗教の事実を scientific に扱うと主張することがあるため、宗教史学とどう異なるのか、差異化が必要であるとする。宗教史学は神学とは異なり、宗教団体や共同体のために研究するわけではなく、自由に、ただし科学のゲームに則って研究を行うのだという。さらに言えば、宗教史学は宗教的事実を人間文化の一部として、宗教を人間の構造 (anthropological structure) として扱う。ただし、宗教は究極的には超越的真実の現実化であるということを宗教史学者も忘れてはならない。宗教を社会的・心理的要因からのみとらえるのは宗教史学のやり方ではない。宗教は「宗教」としてのみ理解されうるのだと Bleeker は強調している。また、比較宗教学はキリスト教の地位を貶める相対主義ではなく、すべての宗教はそれぞれユニークであると論じるのだと述べている。

宗教社会学との関係については、宗教社会学はこのところ人気が上昇した新しい分野であり、宗教史学にとっても重要だが、宗教をもっぱら社会現象であるとするのとらえ方は宗教史学とは相容れないという。宗教には観念的 ideological 側面と社会的 sociological 側面があり、未開宗教なら後者が中心だが（よって社会学だけでも事足りるが）、高等宗教については前者の、純粋に宗教的な要因、宗教の意味を探究する必要があるという。また、宗教社会学を行う場合はディレクタンティズムに陥らないよう、社会学の最新の方法を参照すると同時に、それに依存するだけでなく、宗教共同体に対する社会的要因だけでなく宗教的要因も考慮し、宗教史学の基準にも耐えうる研究にしなければならないと述べている。

宗教心理学との関係については、これは 50 年前、W. James の頃は盛んだったが、現在は困難な状況にあり、再生の必要があるという。人間の内面の探究可能性には限界があるといっても、いわゆる原始心性についてはなお解明の余地があり、フロイト・ユング、特に元型論が宗教史学に貢献するかどうかを検討する必要があると述べている。

宗教現象学との関係については、まず、最近「現象学」が指すものが多様化しているので、「宗教現象学」が何を意味しているかを明確にすべきとし、以下の点を挙げている。

・フッサール学派（現象学＝知の妥当性の理論）とは全く異なる。

- ・宗教史の幅広い事実を体系化したものについて、構造と意味を探究すること。宗教史研究から自然に生じてきたものである（A 宗教の供儀、B 宗教の供儀……と個別宗教史のデータが集まると、それらを比較し、「では供儀とは何を意味するのか」という問いが出てくるのは必然）。
- ・よって宗教現象学は哲学ではなく、体系性をもつ科学的歴史学 *historic science* である。
- ・しかし、宗教現象学がディレッタンティズムに陥らないようにするには、哲学的現象学が役に立つ（知の妥当性の理論であるため）。その方法は、エポケーと形相直観（*eidetic vision*）。この二点については宗教現象学者の間で合意がある。それ以上については現象学者によって異なるが、Bleeker 自身はテオーリアとロゴス概念を使っている。

テオーリアは、宗教現象を研究する上での、偏見のない直接的な方法であり、形相直観に到ることである。宗教現象は、i)対象＝聖なるもの・神 ii)主体＝人間 iii)対象と主体の関係＝様々なタイプの祭儀や宗教的行動 から成るが、テオーリアの目的は、様々な神の認識、様々な人間類型、様々な祭儀類型の、宗教的意味 *implication* を発見することである。

ロゴスについては、歴史的な実在する宗教も、観念としての宗教も、その構造のなかにロゴスは現れている。Bleeker 自身の確信では、全ての宗教は、霊的法則、ロジックに従って形成されている。そのロジックは自然科学のロジックとは異なるが、具体的には、ある宗教の根本的な態度 *attitude* がわかれば、その宗教がどのような神観念・人間理解を持ち、どのような祭儀を行うのかを論理的に導ける。これがロゴスという語が意味するところであるという。

さらに、宗教史学と宗教現象学のあるべき関係として、3点を挙げている。

- ①宗教現象学の2つの意味（一つの方法としての意味と、宗教現象の意味をとらえ体系を作る学としての意味）を明確にする。
- ②方法としての宗教現象学は、全ての宗教史学に適用されるべきである。偉大な宗教史家はみなこの方法を、必ずしも自覚せずに使っている。
- ③体系化としての宗教現象学は、宗教史学からは独立した研究だが、両者は相互の発展に寄与することもできる。宗教現象学は資料を宗教史学から得るし、宗教史学は宗教現象学から現象を整理するための観念や発見法的原理を得ることができる。

以上を踏まえての、宗教史学の役割としては、宗教史学は、上記の宗教諸学を利用するとともに、資料が恣意的に使われていないか目を光らせる必要があると Bleeker はいう。また、宗教史学それ自体の現在の課題は、第一に、分野全体を総合的に評価することができていないため、どの部分が研究不十分かわかっていないこと、第二に、比較宗教、または普遍宗教史 *Allgemeine Religionsgeschichte* としての課題は、宗教間の影響関係、宗教の起源、進化過程などの解明にあると論じている。

最後に、現代は科学技術の時代であり、それに対して宗教史学は「役に立たない」課題にエネルギーを注いでいるが、そのような課題を研究できるかどうかでその文化・文明の高さが試されるのだということを社会に納得してもらわなくてはならないと訴えている。さらに、大勢の人々が宗教的根なし草状態になっている現代において、宗教史学の役割は、宗教について本質的なものと非本質的なものを分け、純粋な宗教は精神的・一霊的強さのもとになるということを示すことであるとまとめている。

以上の報告についても要点をまとめるならば、

- ・宗教学は神学とは違うとしながらも、宗教と宗教学の固有性を主張する *sui generis* 論的立場は明確である。その *sui generis* なところは宗教の観念・思想的側面であり、それは発達した宗教において純粹に現れるとしているところが特徴的であり、この点ではプロテスタント的宗教史観と言えよう。
- ・宗教現象学を、方法としてのそれと、体系的な研究としてのそれとに分けている。直観の方法については、どう行うのかについての説明はなく、その客観性の担保としては、一方では哲学的現象学を踏まえていることを挙げ、他方では偉大な宗教史家は無自覚なまま直観を使っていると述べるに留まっている。
- ・宗教について価値評価を控えるエポケーの方法を唱える一方で、宗教を本質的な部分と非本質的な部分に分けて示すことで、現代人の精神的空白を充たすことに間接的に貢献するとしている。

となる。

現在の視点から見ると、キリスト教の方が未開宗教よりも発達しているとしたり、純粹な宗教性を世界に広めるべきとしているところが規範的である。レリジョニストであるだけでなく、キリスト教優越史観的ですからある。だが、Bleeker 本人にはその意識はなく、また「役に立たない」純歴史学的宗教学の存在意義も主張している。その一方で、宗教現象学の客観性は、堅実な宗教史学に基づいていることと、哲学が妥当性を保証したエポケーと本質直観を用いることで満たされると論じている。

3.3 「宗教史学の将来の課題 The Future Task of the History of Religions」(Bleeker 2015[1960])

これは 1960 年 Marburg 大会の総会前に配布され、Werblowsky からの批判を招いた前述の論文である。大会の最後に、宗教史学というディシプリンについて議論をしようではないかという呼びかけから始まっている。

そのような議論が必要となった背景として、Bleeker は 1958 年の東京・京都大会をふり返り、次のように述べている。日本宗教学会は 1950 年から、イスラエル宗教学会は 1957 年から IAHR の会員であるとはいっても、1958 の東京大会までは IAHR はもっぱら西洋の学者の集まりだった。東京大会のあと、アジア・アフリカに宗教学会を立ち上げるための委員会が設けられ、その結果、インドと韓国には宗教学会が作られた。

東京大会では、研究発表の後にユネスコ後援の東西対話的シンポジウムがあり、日本の宗教に親しんでもらうための多数の寺社へのエクスカージョンが行われた。今後のアジア開催の大会は同様の形式、すなわち宗教学というより宗教的なものになってしまうことが危惧される。このような傾向について賛否両論の議論があったが、Bleeker 自身の考えとしては、東洋の学者も科学的アプローチをとることはできるが、多くの場合（過去の歴史的宗教ではなく）現在の宗教を対象としているため、実践的な研究になっている。

この後に前述のくだりが続いている。Bleeker は、東洋人は直観的、西洋人は論理的であるとする Henri van Straelen（オランダのカトリック神学者）の東西比較論や、石津照璽が東京大会時に引用した姉崎正治の宗教学の定義を引きながら、東洋の宗教学者は直観を用い、西洋の宗教学者は分析的方法を使うという違いがあると述べる。そして但し書きとして、も

つとも、西洋にも直観派は存在するので、問題は、人間の道徳的・宗教的価値の回復 preservation が求められている現代において、社会の需要に宗教学者は応えるべきかどうかということだと論じている。

次に、今日の宗教史学の課題・目的という主題に移り、宗教史学は神学とは異なり、「宗教学的 religionswissenschaftlich」でなくてはならないと論じる。その宗教学の中には、宗教史学、宗教社会学、宗教心理学、宗教現象学（現象の本質を探究し、宗教史学に類型を提供する学）、宗教哲学があり、このうち宗教史学と宗教哲学の間に接点はほとんどないという。

宗教史学と宗教現象学の関係については、Pettazzoni と自分は意見を異にしていると Bleeker は続けている。Pettazzoni は、宗教の歴史的発展を無視するからと宗教現象学に対して批判的だが、これは誤解である。宗教現象学には二つの面があり、一つは科学的方法論としてのそれ、もう一つは諸宗教の総合的研究であり、後者の例としては Eliade, E.O. James, Leeuw, G. Widengren の研究がある。総合的研究としては、Bleeker の考えでは宗教現象学には三重の目的があり、テオーリア、ロゴスに加えてエンテレケイアがあるため、歴史的変化にも対応している。科学的方法としての宗教現象学は、エポケーと形相直観から成る。

上記の意味での宗教現象学は、宗教史学に対して発見法的原理を与える。たとえば、メソポタミアの神話と儀礼の関係を知りたい者に対して、「神話」とは何か、「儀礼」とは何かを示すのが現象学である。宗教現象学と東洋の直観派の学者は、ともに本質をとらえようとするが、前者は慎重に、研究の最後にそうしようとするところが後者とは異なる。このような宗教現象学は偏見にとらわれない、対象から距離を置いた態度と、宗教現象の価値に対する個人的な強い関心との組み合わせである。つまり、宗教史学に対する東洋と西洋のアプローチの理想的な統合であると言える。

以上は自分から見た宗教学の目的だが、他の宗教学者には意見を異にする者もいるようだと、Bleeker はアメリカの宗教学者を挙げる。E. R. Goodenough はより神学的であり、W. C. Smith は宗教間対話としての宗教学を推進している。それらは行き過ぎの感があるが、現代の宗教問題に対して宗教学はどう対応するかという課題を全く無視するわけにもいかないと Bleeker は述べ、よって、純粋に科学的（学術的）な宗教学の成果を応用するのに役立つような指針をいくつか示しておきたいとして、次の4点を挙げる。

- a) 「宗教とは何か」。社会の人々はこれを知りたがっており、答えを提供するのは宗教学者の役目である。
- b) 宗教の種類の提示。これは人々が自分の立ち位置を知る助けになる。
- c) 現在と将来にとっての宗教の価値の提示。この問いには答えたくないという宗教学者が多そうだが、現代人の多くは宗教的にさまよっている。もちろん彼らを特定の宗教に改宗させるのは宗教学者の役目ではないが、宗教にとって本質的なものを示し、純粋な宗教というものはいつの時代も心の支えになることを示すことは必要である。
- d) 共感と寛容的理解。宗教の相互理解は、社会が宗教学者に期待するものである。この点について、Werblowsky は、宗教学者は相互理解を説くのではなく、研究を通して、共感と相互理解の精神が育つことを間接的に望むだけであると論じている。

これら4つの指針を具体的な活動に落とし込むために、IAHR の事務局長として、宗教学者が次の4点において協働することを提案したいとして論文を結んでいる。

- 1)研究が行き届かない分野がないようにしよう。(Marburg 大会ではバビロニアやエジプトの宗教の研究が不足していた)
- 2)Numen の学術的水準を上げよう。
- 3)宗教現象学の本は既に十分に存在するので、これからは各宗教史のモノグラフを共同出版しよう。(祭り、供犠などの概念に沿った各宗教史のこと)
- 4)東洋の学者と定期的に学会を開き、そのテーマを共同で決めよう。一案として、「東洋と西洋における宗教の再想像 reconceiving religion」を提案したい。このテーマならば、厳密に歴史学的に取り組めると同時に、我々の世代の想像力にも訴えるだろう。

以上の論文の特徴をまとめるならば、

- ・アジアなど非西洋に宗教学が広がるほどに、経験科学的な宗教学者ではない、直観を使う宗教家的な宗教学者が増えるとしている。
- ・宗教現象学の本質直観と東洋の宗教学者の直観は異なるものであると説明している。前者は経験科学的な歴史学的研究の末に、データから共通性を取り出すプロセスだが、後者はいきなり真理をつかもうとする技だというのである。他方、宗教現象学は東洋と西洋のアプローチの統合だとも位置付けている。
- ・宗教現象学ではなく、各国の宗教学者の共同研究として総合的な宗教史研究を行おうと提案している。
- ・自身の宗教現象学論においてはエンテレケイア概念が導入されているが、これは歴史を捨象しているという現象学への批判への対処であり、Pettazzoni をはじめとする歴史学を重視する IAHR 会員との交流の中から生まれたものである。

といったところが挙げられる。

東洋人は直観的、西洋人は論理的というステレオタイプを挙げた後にすぐ、西洋にも直観派はいると補足している。だが、その但し書きがあっても先述の後藤・田丸論文がこの発言を偏見として記しているのは、価値序列をつけた二分法自体を反省したわけではなく、アジア人的な非論理的学者は西洋にもいると言っているに過ぎないからである。科学的とは経験主義的で分析的な思考を行うことであり、それに基づく宗教学は優れているという学問観を維持したままでは、西洋にも直観派はいるという発言はリップサービスにもならない。

また、その「直観」は自分が推進する宗教現象学の本質直観とは違うのだということが初めて説明されている。その差異化は 1958 年大会で日本の宗教学を知ることにより必要になったのだということがよくわかる。

だが、そのように科学派を装っても Werblowsky 等から批判を浴びたのは、Bleeker の方法論上の問題のほか⁸、アメリカの宗教学者ほどではなくても直接的に社会に貢献することを

⁸ 後に Werblowsky は宗教現象学と自分のアプローチの違いを 1987 年の論文で次のようにまとめている。

研究とは説明することだが、宗教を他のものに単に還元する (explain away) ことではないとは、宗教現象学者同様、自分も思っている。自分が賛同しないのは、van der Leeuw や他の宗教現象学者が主張する、「理解 (Verstehen)」の方法である。宗教現象学者は、宗教のような人間の精神の創造物をとらえるには、特別な理解という特別な認識方法を使

IAHR に呼びかけたためであることがわかる。その社会貢献の中には、前報告と同様、真の（純粋な）宗教を見極めること、宗教の相互理解を説くことが含まれている。

3.4 「回顧と展望 Looking Backward and Forward」(Bleeker 2015[1975])

Bleeker は 1970 年のストックホルム大会で事務局長の任期を終えるが、その際、1950 年と同じタイトルの講演を行った。1975 年刊行のプロシーディングスに収められている。まず、1970 年までに開催された IAHR 世界大会とそれぞれの大会テーマをふり返り、さらに Numen とその他の出版企画について報告している。そして、念押しすれば、IAHR は特定の目的のために存在するのではなく、学术交流の場を提供するものに過ぎないと述べている。

続いて、過去 20 年間の宗教学の動向を網羅的にサーヴェイするのは不可能だが、いくつかの中心になりつつある傾向をまとめたいと述べ、次の 5 点を挙げている。

1. 専門化が進み、研究の方法も厳密になり、かつての原始心性論などの一般理論は消滅した。その代わりに浮上しているのは、宗教史学の最終的な目的は何かという問題である。文献学は方法に過ぎず、それによって何をなすかが問題である。現象の宗教的な意味を解明しなくては、目的を達成したと言えないのではないか。
2. 宗教現象学は当初は批判も受けたが、このところ人気を得て、IAHR 会長 Widengren も現象学は宗教の本性と構造を理解するのに不可欠だと論じている。もちろん Pettazzoni が指摘する現象学の弱点である、歴史的側面を補うことは必要だが、その上での総合的な研究を、宗教現象学として行うか、他の名称・枠で行うかが、現在、問題になっている。Bleeker 自身は、現象学は、研究の前提を反省するという点でなお重要であると考えている。
3. 古代宗教史研究が減り、現代の宗教に関心が移っている。ただし、注意すべきは、世俗社会で宗教を新たに定義づけたり、宗教間の相互対話を促したり、世界平和を目ざしたりするのは宗教史学の役割ではないということである。歴史的真相を解明すること自体に宗教史学の意義はある。
4. 宗教社会学・心理学の人気は上がっていない。宗教社会学・心理学においては、社会学・心理学の方法をしっかりと身につけることが必要である。他方、統計的手法だけでは宗教をとらえるには不十分である。
5. 現代の宗教からは超越性が失われ、人間・内在的なものに変化している。そのこともあって、人類学・人間学が大流行りである。だが、宗教史学は、人間の現象として人間を研

う必要があるという。この「理解」とは、現象をあたかも内側から理解する直観的な共感力 *intuitive empathy* のことである。これは、その能力を持たない人は宗教を理解できないとすること、比較すれば音痴は音楽を理解できないとすることである。しかし、共感や直観は制御できず科学的検証も不可能である。この方法では非科学的印象主義に陥ってしまうだろう。(Werblowsky 1987)

このように Werblowsky は、直観を、データから共通性としての本質を看取することではなく、当事者（信者）にとっての意味を理解することとしてとらえている。宗教現象学の方法は Leeuw の時からこれら 2 つの意味を帯びていたが、Bleeker の論文は前者、Werblowsky の論文は後者に力点を置いているのは、1980 年代には宗教現象学が解釈学化し、類型論から信者にとっての意味の理解に移行していったという、時代による違いも影響していよう。

究するだけでなく、人間の人間的本性を大きく変えてしまうような、人間を圧倒する「聖」の概念についての洞察を提供すべきである。

最後に、今後の課題を5点挙げている。

1. 宗教史学の最終的な目的は、多様な形で現れる、宗教の本質と構造をとらえること。宗教史学は自律的な分野であり、宗教の内的ロジックを解明する。社会は急速に変化しており、宗教学も変わっていくかもしれないが、まず出発点としてこのことを確認しよう。
2. 宗教現象学が提起した方法論問題を、概念に注意しながら検討する。
3. 蛸壺にこもらず、宗教学全体を見渡したり共同研究を試みる。
4. これまでの大会テーマを見ると、人類学と儀礼・祭祀 cult の取り上げが不足している。
5. 現代人は宗教的・文化的危機に直面している。これに対して、宗教学者は信仰復興を行うことはないが、宗教の価値を明確に示すことによって貢献できる。客観的な宗教史学は、宗教はいつの時代も、文化を霊化 (spiritualize) するのに貢献し、貴重なものであり続けていることを示す。

以上からこの講演の特徴をまとめると、

- ・冒頭から、IAHR は学術外の目的のために存在するのではなく、学術交流の場を提供するものに過ぎないと明言するなど、1960 年大会時に受けた批判を意識していることが窺われる。しかし最後には、宗教史学は宗教に価値があることを示し、社会の宗教的活性化に間接的にでも貢献するという、規範的な語りをとっている。注目すべきは、「客観的な宗教史学」をそのような規範的な目的に結び付けているところである。
- ・1970 年頃は文化人類学が躍進した時期であり、講演中の「anthropology」は人類学を指す可能性が高いが、哲学的人間学の可能性もないわけではない。だがいずれにせよ、宗教史学は宗教現象を人間についてのみ見るのではなく、聖概念を措定すべきだとしているところは、1953 年の報告とは力点が移動している。1953 年の報告の方は、神学との差異化という文脈だったこともあるが。
- ・この時代はカウンターカルチャー期であり、西欧の中産階級の若者の間で精神的希求が高まった時期だが、Bleeker の時代認識の表現は、1950 年代から変わらず、同時代人は宗教を失い、精神的にさまよっているというものである。
- ・文献学的宗教史学だけでは学術的意義に乏しく、総合学としての宗教現象学が必要だという論点も以前と変わっていない。
- ・宗教現象学に対する批判は、初期 (1950 年代) の方がむしろ強く、1970 年頃には宗教学者の間で好意的に受け止められていたという発言は、同時代の記録として貴重であろう。他方、総合学として、宗教現象学とは異なる枠組みも模索され始めていたことが窺われる。

4. 単著に記された学問論・方法論

Bleeker の単著としては、エジプト宗教史に特化したもの以外では、『虹 The Rainbow』(Bleeker 1975) と『聖なる橋 Sacred Bridge』(Bleeker 1963) が知られている。いずれも既

発表論文をまとめて Numen 叢書として出版したものである。『虹』の「序」は、本書は読者を「真の宗教の秘密へ誘う」ものであり、宗教史学の最終的な分析の主題は「個人の信仰 personal faith」であるといった記述から始まっている。さらに本書のタイトルは、宗教は、究極的には、神と人間、天と地をつなぐものとしてのみ理解できるという Bleeker の確信を表したものと記されているように、IAHR での講演や報告に比べ、宗教色が一段階強い。ただし「序」に比べると、方法論・学問論に関する収録論文の多くは Numen 誌上や Numen 叢書で発表されたものの再掲であり、IAHR での講演と論点に大きな違いは見られないが、具体性がありわかりやすい。紙幅の制限により、ここでは『虹』所収の関連論文をいくつか確認するに留める。

4.1 「方法論と宗教学 Methodology and the science of religion」

この論文の初出は、Edward J. Jurji, *Religious Pluralism and World Community*, Supplements to Numen XV, 1969 である。

まず、現代社会は、道徳が崩壊し、核戦争の危機にさらされるという問題の一方で、世界共同体 world community が現実化する、新時代到来の希望も感じさせるという時代診断から説き起こしている。そして、Bleeker 自身がそのような世界共同体の形成のために活動してきたことにも言及がある。その世界共同体は宗教多元状況にあり、となると、宗教も一つに統合すべきなのか・されるのかというのは大きな問題であり、この論文の射程ではないが、自分はそれには懐疑的であるという。それでは諸宗教の相互理解にはどのような方法が有効かといえ、そのことを論じる会議には多数立ち会ってきたが、科学的な方法抜きにはほとんど意味がない。したがって、諸宗教に関心をもち、宗教学 science of religion がもたらす知識を総動員することが現代社会にとって必要であると論じている。

そしてその宗教学の科学的方法こそが、現象学的方法であるとし、宗教現象学を説明している。宗教現象学という言葉は、科学的方法を指す場合と、独立した科学分野を指す場合があること。宗教現象学者は、Husserl に影響を受けていること。ただし、エポケーや形相直観 eidetic vision は、Husserl の概念の比喩的な適用であることを断っている。

続いて、その宗教現象学の方法を、現在の宗教の多元性を解明するという課題に適用することによってわかることを7点挙げている。

- (1) 宗教は普遍的な人間の現象である。人間には必ず宗教意識、聖なるものへの恐れ fear for the Holy が伴われる。
- (2) どの宗教も真理要求をもつ（神に出会ったと主張する）。偽善は常に存在するが、信者の真理要求はまず真剣に受け止めるべきである。
- (3) 宗教の多元的状況をとらえるには、純粋な宗教を非宗教から分ける定義が必要である。宗教は真剣な究極的関心事であるとする、Tillich の定義が作業的定義として良い。
- (4) 宗教現象学の成果で一般に受け入れられていることとして、宗教は3つの部分、すなわち神、人、神と人の関係、に分かれている。
- (5) 宗教現象の（共時的）ロジックとして以下の要素がある。
 - (a) 宗教的信念の表現形態は比較的限られており、たとえば神と人間の関係は、どの宗教でも、父—子、主人—召使、友—友、恋人同士、のいずれか。しかし、類似は表面的にす

ぎないこともある。

- (b)宗教は *sui generis* で非宗教的要素からは説明できないし、各宗教は個性を持っており、それは時間をかけて研究をして初めて理解できるものである。
信者でない限りわからないこともあるが、知識と宗教的直観 *religious intuition insight* によって、その宗教のユニークさをとらえることは可能である。
- (c)各宗教は、他の宗教にはない、あるいは目立たない、固有の特徴を有している。それをとらえることは重要である。ゾロアスター教は軍事的敬虔さ *militant piety*、ユダヤ教は神に対する深い畏怖、イスラムは無制限の服従がその特徴である。
- (d)宗教の構造をとらえるには、まず、「その宗教の信者はどのようにして神を知るのか」を調べるとよい。古代宗教は、宇宙の中に聖なる秩序を見る。インド宗教は、悟りによって。歴史的宗教（歴史観念をもつ宗教）は、聖なる歴史から神についての知を得る。
- (e)各宗教においては、以上の4つの構造の要素が、結び合わさっている。キリスト教の場合なら、それは歴史上の神の啓示という観念に基づいており、そのユニークな特徴は愛の観念である。
- (6)現在の宗教の多元的状况は、以上の原理に基づき、それぞれの根本的なパターンをとらえると理解できる。しかし、歴史とともに、その根本的なパターンが変化し不明になっていることも多い。特に現代では、もともとの特徴が無神論的風潮によって弱められたり、逆に復活したり純化したりしている。
- (7)現代社会では、異なる宗教の信者が出会いやすく、互いの共通点に気づくことも多い。しかし、人間に注目すれば共通点も多いが、個々の宗教のパターンは独特であり、それは、宗教現象学を用いて宗教的に理解するしかない。

結語としては、宗教学は単なる趣味ではなく、現代人にとって必須のものであり、政治・経済・社会における様々な失敗は、宗教を知らないことから生じていると主張している。社会の指導者たちはみな宗教学を身につけるべきであり、そうなれば、国家間の相互理解が進み、調和が達成しやすくなるという。

以上からこの論文の特徴をまとめると、

- ・自分が世界共同体の形成のために実践的活動を行ったことがあると述べているところは、IAHRでの講演類にはなかったことであり、注目に値する。「世界共同体」は、直接的にはこの論文が書かれたころに活発だった、カウンターカルチャー運動の若者の連帯を指すと考えられる。また、Bleeker 本人の経験として述べているものは、戦間期に参加していた自由キリスト教系青年運動・宗教間対話運動であろう。
- ・その一方で、宗教の相互理解は、宗教学の直接的目的ではないと述べるところは、IAHRの場での講演や報告と同じである。相互理解は社会的には重要だが、それを実りあるものにするには宗教史学が必要だという順序で論じている。
- ・宗教間の相互理解については、現在の異文化理解のとらえ方とやや異なるのは、それぞれに妥当性をもつ宗教（Bleeker の言葉では純粋な宗教）が複数存在するという状況自体が説明を要するものととらえられていることである。宗教現象学はその状況を科学的

に説明するものとして位置づけられている。もっとも、宗教現象学の適用の成果として示されている諸宗教の描写には、現在であればプロテスタント的視点からのステレオタイプと評価されるようなものが並んでいる。

4.2 「宗教史学的方法と神学的方法の比較 Comparing the religio-historical and the theological method」

この論文では、神学者・宗教哲学者からの宗教現象学批判を受けて書かれているところが特筆に値する。Bleeker の反論の論点は次の 2 点である。

- ・宗教現象学のエポケーや形相直観の語は、単に比喩的な意味で使われており、神学的・哲学的意味はない。
- ・宗教現象学は、宗教の本質の学ではない。宗教現象学が行うのは、宗教現象のまとまりの中に構造を見出すということのみである。宗教哲学は、簡潔な定義によって、宗教の本質を定式化しようとするが、宗教現象学は、宗教の構成要素の構造や意味を理解しようとする。とはいえ、宗教史学や宗教現象学でも本質の問題は重要であり、というのも、無意識にでも「宗教とは何か」についての概念を（研究の最初から）持っていなければ、宗教と宗教ではないものを区別することもできない。

この論文の初出に関する情報は付けられていないが、宗教現象学の本質直観という方法について、IAHR での講演での言及よりも丁寧に説明している。また、1953 年の報告にあった、本質直観の客観性は哲学的現象学により担保されているという論調は、この前の「方法論と宗教学」論文もそうだが、トーンダウンしている。多くの事例の中に事後的に（帰納的に）パターンを発見することであるという言い方により、神学・哲学的方法との差異化を図っている。

4.3 「真の宗教と偽の宗教を区別する方法 How to distinguish between true religion and false religion?」

この論文は、デンマークの宗教哲学者 Søren Holm への記念論文集（1971）に寄稿されたものである。Holm が、真の宗教と偽の宗教を客観的に区別することは不可能であると述べたことに対して、哲学的にはそうであっても、実社会ではその区別はしばしば必要になるため、基準を設けることが可能かを検討している。さまざまな事例を取り上げつつも、最終的な結論は、基準はないわけではないが、そのような基準は知恵と慎重さをもって扱うべきであるというもので、明確に基準を示しているわけではない。

しかし本稿にとって興味深いのは、宗教現象学は宗教の真偽に関しては判断を停止する（エポケー）をその出発点に置くことで知られるにもかかわらず、Bleeker が真偽判断にこだわる場所である。宗教現象学の方法論とこの関心は矛盾しないのだろうか。

この論文からは、Bleeker が、実社会では宗教の真偽判断は必要であると考えたことの根底には、ナチズムの脅威という歴史的経験があることがわかる。出版当時の状況では、社会を危機に陥れる疑似宗教への警戒心は増加するセクト問題への懸念として表明されている。その一方で、この論文では宗教現象学にも言及がある。

それによれば、宗教現象学は確かに先入観を排除し、宗教現象を理解しようとするが、宗教の「本質的質」を探究する段階で、宗教の真偽判断のための基準を作るのに役立つという。つまり、この論文では、宗教現象学は単に諸宗教の共通特徴をパターン認識によって取り出すだけでなく、真の宗教と偽の宗教を分ける、宗教の「核」にあるものを究明するとされている。さらにそれは、「宗教が信仰者にとってもつ意味を理解すること」だとも言い換えられている。宗教現象学は確かに神学や宗教哲学の真理問題は扱わないが、まったく真理問題に関係しないわけではない、というのも、宗教を単なる社会現象・心理現象と見なすことには反対するからだとして述べている。

まとめると、宗教学者は、宗教の真偽に関する先入観を排除するために、最初にエポケーを用いるが、最終段階の本質をとらえる方法は、宗教にとって非本質的なものを取り除く作業であるため、真の宗教を取り出すことに等しいと考えていたことがわかる。またそれは、宗教の核をとらえることと表現され、類型論を構築するための共通項を見いだす帰納法のプロセスとは異なるものとされている。

おわりに

以上を総合するならば、レリジョニストにも科学派にも見えるという Bleeker の二面性は、信仰があったからこそ、神学から距離をとるべく、客観的な方法をとらねばならないという自覚があった者の葛藤としてもっともよく理解できる。その信仰は、近代のリベラルなプロテスタンティズムに基づくものだった。神と人（個人）との関係にフォーカスして宗教をとらえ、宗教の観念的側面を宗教にとってより本質的なものととらえるところにそれが現われている。だが、少なくとも本人の意識の上では、プロテスタンティズムを世界に一律に広めれば平和が訪れるとは考えられておらず、ナチズムのような危険な疑似宗教を取り除いた上で、諸宗教がお互いに理解を深めれば、グローバルな共同体が出現するという願いだった。そのような宗教の相互理解を重視する態度もリベラル・プロテスタントに顕著なものだったが。そして自己の研究の客観性を宗教現象学という方法で担保しようとした。

この信念は 1950 年代から 70 年代まで一貫している。それに比べ、宗教現象学の取り上げ方は、発言の場によって変わることがあった。本質直観が神学的・哲学的だと言われればひっこめる。しかし、真の宗教と偽の宗教を区別するには宗教の本質を見極めなくてはならないという文脈になれば、本質直観的方法を持ち出す。その本質直観は、アジアの学者の直観とは違うといってその科学性を担保しようとするともあれば、宗教現象学は東西の方法の総合だと述べることもある。これは日和見主義というよりも、IAHR の事務局長という立場で、信念を保ちながら自分の考えをさまざまな会員に伝えるには、そうせざるをえなかったことが、各講演・発言を精査するほどに見えてくる。この Bleeker の二面性は、そのまま宗教現象学が内包する矛盾点⁹を表している。そう見るならば、本人の自意識の実際のところはわからないが、宗教現象学の両義性がよく現れているという点では、Bleeker は典型

⁹ 本論集の「はじめに」を参照。

的宗教現象学者であるということができないのではないか。

アメリカへの対抗意識については、本人による公的な発言からは窺い知ることはできなかった。だが最後に、Bleeker が Werblowsky よりも宗教学の社会的有用性を積極的に論じようとしたことについては、もう一つの補助線を引いておこう。それは IAHR とユネスコとの関係である(Bleeker 1958)。Bleeker はたびたびユネスコや CIPSH (International Council for Philosophy and Human Sciences 国際哲学・人文学会議) の会議に出席した。ユネスコや他分野の研究者に、宗教学の存在意義を訴えることは事務局長の重要な任務だった。宗教学は歴史学・文献学では満足しないという論点は、CIPSH の中で、IAHR は国際歴史学会議(CISH)の下位学会ではないと示すためにも必要だったことが推測される。宗教学の社会的意義を示せるかどうかはユネスコからの助成金にも影響した。東洋と西洋の対比を使うのも、ユネスコが当時、「東西プロジェクト East-West major project」を推進していたことと無関係ではないであろう。IAHR 各加盟学会に敬意を示し、IAHR をヨーロッパの外に広げ、全体をまとめようとする意志は、国際学会として当然のことではあるが、ユネスコの支援もあり、科学的ではないと思ったからといって特定地域の研究者と関係を持たないわけにはいかなかった。Bleeker が抱え続けたこれらの課題は、基本的には現在も続いているものばかりである(藤原 2023)。

文献

久保田浩 2021「宗教史的文脈の中の C・J・ブレーカー(1898-1983)——「宗教現象学者ブレーカー」という解釈枠組みを超えて」(科研費基盤研究 B「宗教現象学の形成と論争に関するトランスナショナル・ヒストリー」研究会での発表)

後藤光一郎・田丸徳善 1980「日本宗教学会五十年の歩み」『日本宗教学会五十年史』

藤原聖子 2023「宗教「学」をめぐる論争の変遷と現在——国際学会のアイデンティティ・ポリティックス」『東京大学宗教学年報』40: 1-22.

Ambasciano, L. 2019. *An Unnatural History of Religions: Academia, Post-Truth and the Quest for Scientific Knowledge*. Bloomsbury Academic.

Bleeker, C. J. 1958 “Recommendations Made By the 9Th Congress for the History of Religions At Tokyo,” *Numen*, 5(1): 237-240.

----- 1963. *The Sacred Bridge: Researches into the Nature and Structure of Religion* (Studies in the history of religions, 7). Leiden: Brill.

----- 1975. *The Rainbow: A Collection of Studies in the Science of Religion* (Studies in the history of religions, 30). Leiden: Brill.

----- 2015[1951] “Looking Backward and Forward,” in *NVMEN, the Academic Study of Religion, and the IAHR*, ed. by A. Geertz & T. Jensen. Leiden: Brill.

----- 2015[1954] “The Relation of the History of Religions to Kindred Religious Sciences, particularly Theology, Sociology of Religion, Psychology of Religion and Phenomenology of Religion,” in *NVMEN, the Academic Study of Religion, and the IAHR*, ed. by A. Geertz & T. Jensen. Leiden: Brill.

----- 2015[1960] “The Future Task of the History of Religions,” in *NVMEN, the Academic Study of*

- Religion, and the IAHR*, ed. by A. Geertz & T. Jensen. Leiden: Brill.
- 2015[1975] "Looking Backward and Forward," in *NVMEN, the Academic Study of Religion, and the IAHR*, ed. by A. Geertz & T. Jensen. Leiden: Brill.
- Casadio, G. 2015 "NVMEN, Brill and the IAHR in Their Early Years: Glimpses at Three Parallel Stories from an Italian Stance," in *NVMEN, the Academic Study of Religion, and the IAHR*, ed. by A. Geertz & T. Jensen. Leiden: Brill.
- Congress Organizing Committee, ed. 1961. *X. Internationaler Kongress für Religionsgeschichte, Marburg 1960 (Proceedings of the IAHR World Congress in Marburg)*, N. G. Elwert Verlag.
- Schimmel, A. 2015[1960] "Summary of the Discussion," in *NVMEN, the Academic Study of Religion, and the IAHR*, ed. by A. Geertz & T. Jensen. Leiden: Brill.
- Toti, M. 2013 "Il carteggio Pettazzoni-Bleeker. Alcuni aspetti," *Historia Religionum: An International Journal*, 5: 75-91.
- Van Voss, M. H. 1987 "BLEEKER, C. JOUCO," in *Encyclopedia of Religion*, ed. by M. Eliade, NY: Macmillan. 現在はオープンアクセス
<https://www.encyclopedia.com/environment/encyclopedias-almanacs-transcripts-and-maps/bleeker-c-jouco>
- Werblowsky, R. J. Z. 1987 "Perspectives on Religion and the Comparative Study of Religion: An Interview with R. J. Zwi Werblowsky," *Religion in Southern Africa*, 8(2): 51-59.
- Wiebe, D. 2021. *An Argument in Defence of a Strictly Scientific Study of Religion. The Controversy at Delphi. A Critical Account of the Meeting of the Extended Executive Committee of the International Association for the History of Religions. September 13–15, 2019 Delphi, Greece.* Toronto: Institute for the Advanced Study of Religion.